

子どもと造形

児造研ニュース

児童造形教育研究会機関紙 編集・発行人 長尾宏一 事務局 〒111-0051

> 台東区蔵前 3 - 20 - 2 クレパスビル内 03(3862)3937

第33回児童造形教育研究集会

「 図工で培う子どもの力 −子どもの活動からみる新指導要領 Part2 」 をテーマに

児童造形教育研究会 会長 長尾 宏一

私の勤務校では、「造形展」を「造形フェスティバル」と称して取り組んでいます。何がちがうのかというと、子どもたちがつくった作品を鑑賞するだけでなく、子どもと保護者・地域の皆さんで造形活動を楽しみ、コミュニケーションを広げる企画になっているのです。

その企画とは、

1年生と地域の幼稚園児が一緒に作品をつくって飾り、多くの園児と保護者に来場してもらいました。
11店のワークショップを児童、中学生、高校生、保護者、地域の皆さんに開いてもらい、児童だけでなく多くの地域の皆さんに参加してもらいました。
土曜の夜、作品の中で地域の6団体が演奏やダンスを披露し、大人も子どもも楽しみました。
有志児童が来場者に作品を紹介して回るツアー・ガイドを行い、鑑賞を楽しんでもらいました。
縁日の店をつくり、児童がつくったもので遊んでもらいました。



150 名も参加したお店も!

そこには、造形 活動を通して子ども たちが培う力を充分 に感じてもらいたい、 造形教育のすばらし さ、大切さを知っても らいたいという思い があるのです。 また、子どもたちが 表現する過程におい ても友だちと考えを出 し合ったり、力を合わ せてつくったりすることを大事にしました。 共同で縁日のお店を つくったり、大きなバ ナーをつくったり、子 どもたちはそれぞれ に力を発揮して表現



みんなで大きな絵を描く5年生

するよさを味わいました。

保護者や地域の皆様からたくさんの感想が寄せられました。作品から子どもそれぞれに違う発想や工夫を感じたというものが多かったですが、子どもたちの企画力や人と関わる力、協力する力などを感じた方もたくさんいらっしゃいました。

図工で培う子どもの力は、表現力だけではありません。 今回の児造研の研究会では、

- A 自分でみつける
- B 友だちとのかかわり・コミュニケーション
- C 経験を活用する
- D ものの感じ方、見方、考え方を広げる・深めるの4つについて話し合いや実技を行い、新学習指導要領が目指す「生きる力」を明らかにしてみたいと思います。ぜひ、夏の研究会に参加していただき、新しい学習指導要領を、そして造形活動のすばらしさを体感してみてください。

今年のテーマ

「 図工で培う子どもの力 —子どもの活動からみる新指導要領 Part2 」 によせて・・・実技研修会にむけてスタッフからのメッセージ

子どもの創造的な思考力を育てるために安 倍 啓 斎

昨年度の校内展覧会、4年生が等身大以上の大きな「夢の動物」をつくったときのことでした。それぞれのグループがどんな動物にしようか相談しながら、活動を進めていました。使う材料は色画用紙、お花紙、うすば紙など、いろいろな紙類でした。「どういうふうに顔つくる?」「そうだね。」…しばらくいろいろ試した後、ある子がお花紙を薄めた木工用ボンドで練り、粘土のようにした材料で目や鼻などをつくり始めました。「どう、ライオンに見える?」「ライオンというか、なんか怖い顔だね。」「しかも胴体と組み合わせるととてもインパクトあるよ。」「なんだか平成小の守り神っていう感じだね。」あるグループがつくりながら、会話していた様子です。

学習指導要領を読んでみると共通事項の所にこんな下りがありました。「社会や大人の持つ知識や習慣を受動的に理解させるのではなく、自分の感覚や活動と一体であるようなイメージを持つ…」まさにこのことがあの子供たちの活動に見られたのだなと思いました。友だちと相談しながら、1年生の時にやった活動を思い出し、その方法を活用してつくっていました。ここでは、つくりながら話し合い、手を働かせながら表したいイメージは明確になっていき、それを友だち同士で共有していることが分かります。子どもの創造的な思考力を育てるには、子どもの中で起きていることに教師が目や心をを傾けていくことが重要だとつくづく感じました。





保護者へのメッセージ 授業参観の資料より 「上手な絵ってなんだろう?」

石賀直之

前任校でおこなった4年生の最後の授業参観の時に配布した資料がでてきました。こんなこと考えながら授業をしてたんだなと思い出されます。よろしければご一読ください。

大変元気のよい 組の子どもたちは図画工作の時間も 生き生きと表現しています。しかし、この頃の子どもた ちはこれまでのように楽しく絵をかくことができなくな ってくることもあります。それは、まわりの様子が客観 的に見え始め、無意識のうちに友だちの作品と比べたり、 自分のかいたものが本物とあまりにもかけはなれている ことに気づくからでしょう。

昨日、事前に絵をかくことが得意かどうかアンケートをとったのですが、絵を描くことは好きだけど、得意じゃないという子どもたちが大変多かったようです。得意かどうかは人に聞いてみないと分からないという声も聞かれました。絵が得意かどうかはどうやら「他人の評価」が重要なようです。

幼児期の頃はぐるぐると「なぐりがき」をしながらもひとつひとつに「これがママ、これがパパ」と言うなど意味があるものです。(ご経験のある方もいらっしゃるのではないでしょうか。)そこには絵をかくこと本来の喜びがあります。絵をかく、表現するというのは本来楽しいことであり、喜びであるはずなのです。

今回は年間の図画工作を通して私が子どもたちに伝えたい「自分らしさの追求と表現の喜び」を鑑賞の授業を通してメッセージしたいと思います。この授業を通してよさやおもしろさ、美しさを自分なりに判断できるようになるとともに、他の人のよさを感じることができる子どもに育ってほしいと願っています。



子どもがみつけることと「鑑賞」

大泉義一

「鑑賞」が行われる代表的な場の一つとして「美術館」がある。実はこの施設の起源は,大航海時代にヨーロッパの貴族が各国を旅する過程で収集した珍しいモノ・不思議なモノをストックした展示室にあると言われている。さらにこの展示室は「Wonder Room」と呼ばれていた。ここからわかるように,未知な意味や価値に対する憧れ,いわゆる好奇心がその出発点になっているのだ。ここにおいて,「自分がみつけること」と「鑑賞」とが大きく関連していることがわかる。

さらに上述した「Wonder Room」に展示されていたモノが必ずしも芸術作品ではないことからもわかるように、 そもそも鑑賞の対象とは、日常に存在している好奇心を くすぐるあらゆるものが該当することとなる。

なので,子どもが鑑賞する対象についても,次のように考えることができる。・・・子どもたちは,常に外界の事物・事象と能動的にかかわることで価値ある対象を弁別している。・・・つまり,子どもが鑑賞するとは,彼/彼女が生きている環境や風景から「いいな」「面白いな」「えっ」というような感情や感覚を揺さぶられる対象を「みつける」活動だということになる。

それでは、そのような「鑑賞」を学習化することには どのような意味があるのだろうか。例えばある形を見て それが線や点の集合ではなく、「りんご」であるように 「みる」ことからも、我々は「みる」と同時に「価値付 与」を行っている。よって鑑賞学習には、「みる」こと (それには先に述べた通り、それ自体に楽しさ、そして 日常性が存在している)を通して、自分なりの「意味や 価値」を「みつける」「つくりだす」ことに大きな意味 があるのだと言える。

大人だって造形活動は楽しい

北川智久

本会の魅力は、なんといっても実技研修の内容の充実 である。ざっくばらん討論会では、参加されたみなさん は口々に感想を述べられる。

「勉強になった。9月からの授業に生かしたい。」

「楽しかった。やはり表現することは楽しい。」

前者の感想のように、授業のネタ探しとしての魅力が 満載で、手を動かしながら気軽に質問ができるし、秘伝 の(?)指導方法を聞くこともできる。

後者の感想は意味が深い。ネタ探しをしに来たつもりだった先生も、自分が児童・生徒の立場で実技研修に参加したらとても楽しい気持ちになれたということだ。初めは技術的なことを学ぼうと一生懸命になっていたものの、いつしか表現活動の楽しさにはまってしまう。知らず知らず脳内にドーパミンが発生して気持がよくなる。「きっと、子どもたちも楽しいんだろうな。」

「うまく表現させることばかり考えていたけれど、こういう気持ちにさせてあげることの方が大事なんじゃないかな。」

参加者の表現から工夫やこだわりを見つけて声をかけてあげると、「なんで私の心がわかるの?」というように驚きながらうれしそうな笑顔を返してくれる。こちらもうれしくなる。共感的に理解しながら意見を言うと、「それはいい。」「そうじゃなくて、私は…」などと会話が弾む。

「あの時の声かけがうれしかった。やる気を出させる声かけって大切ですね。私もやってみます。」

ハウツーは大切だが、造形活動で何を育てたいのかを しっかり持つことは同じように大切。さあ、今年も楽し くいきましょう。



桐山卓也

粘土と絵の具で表現する楽しさを!

中村哲夫

私は、子どもたちが造形活動の中で、主体的に取り組み、新たな気づきや発見ができるようにと願って日々実践している。学校教育における子どもの造形活動は、様々な物や事や場との関わりの中から生まれる。その中で子どもたちが体得した経験や感性、発想力や想像力をもとに造形表現を通して新たな意味を生み出していくところに重要性があると考えている。だからこそ、その活動が主体的に行われていることに大きな意味を持たせたい。

自分でやりたいことを見つけ、自分が伝えたいことの表現方法を見つける。そして、自分で材料をさがし、自分で計画を立てて見通しを持って製作する。うまくいかない時は自分で工夫して乗り切るなど、自分で考えて行動できる力を育てることを日頃から考え授業を組み立てている。また、こうした活動で、自らの想いを達成させるためには、他者との関わりは必須である。必要となる情報を集めるため、教師に助言を求めたり、友達と話し合ったり等は、コミュニケーション能力を育む事にもつながる。私はこうした力こそ「生きる力」と言われているものなのではないかと思う。

今の子どもたちは、遊び等自由に使える時間がなくなってしまっていると感じる。塾や習い事が忙しく、自由に遊んだり、自由につくったりする体験が少なくなってしまっている。受動的活動の場面は多く見受けられるが、能動的な活動は少ない。

何をしてもいい、自由な時間と空間の中で、目的を持って活動できる。見通しを持って計画をたて製作する力を育て、また、失敗の中から学習していく。図工だからできるこうした活動は、造形的な力だけではなく、生きていく上でも重要な力ではないであろうか。



粘土と絵の具を使って,いろいろな表現方法を試して みませんか?

意外な発見・驚きが,2学期での授業で楽しさを引き 出してくれるかもしれません。

参加をお待ちしています。







名達英詔

私たちの生活。その中で人は何と多くの「!」や「?」を生み出す仕掛け、工夫を準備し、設えているでしょう。 造形、音楽、文学に演劇、スポーツ、料理、科学に調度 品。それこそありとあらゆるものに「!」と「?」を発 生させる役目を与え、生み出し、浸っています。「!」や 「?」は別の言葉になおせば「感動」と「疑問」とでも 言えるでしょうか。私たちは「感動」と「疑問」で埋め 尽くされた環境の中に身を置いています。しかもそれは かなり能動的に…。人がこのように暮らしていることは 単なる偶然とは思われません。

私たちがそれらを求めるには何か理由があるでしょう。

人だけでなく多くの生き物がその命を永らえ、より良く生きるために学ぶことをしますそうした中、学びを通して「感動」と「疑問」を心に宿す者は人に極まるのではないでしょうか。いや、それどころか自らの身の回りを「感動」と「疑問」を生みだす仕組みでいっぱいにしてしまっている私たちの姿から考えると、むしろこれらを積極的に利用して、"学び続ける状況"を創りだしていると考えた方が自然とも思えます。

私たちは往々にして「言葉にできない…」などといいながら強い「感動」や「疑問」を語ります。これは、この二つが感覚的なもの、直感的なものであることを示唆しています。感覚的、直感的というと根拠のないことのようにとられがちですが、やはりこうした感覚によって私たちの生活が支えられていることも否定できません。むしろそうした感覚からの「感動」や「疑問」が入り口となるからこそ豊かな学びが始まることもあるでしょう。図画工作科、美術科の新しい学習指導要領指導要領に「感性」という言葉が加わりました。造形を通した学びだからこそ出会える「感動」と「疑問」にあらためて目を向け、感性という視点からその意義を見いだし、学びを考えていくことができればとも思います。





図工・美術における「コミュニケーション」 林 耕 史

学校教育の現場にコミュニケーション能力の育成が求められて久しくなりました。加えて,新学習指導要領では,言語活動の充実も求められています。では,図工・美術におけるコミュニケーションとはどんなものでしょうか。言語活動の充実をふまえて考えると,言語による表現・鑑賞がすぐに想起されます。最近では,鑑賞の授業が楽しく豊かな言語活動によって活発に行われるようになりました。しかし,ここで忘れてはならないのが,言語によらないコミュニケーションです。

図画工作科改訂の基本方針として「創造性をはぐくむ造形体験の充実を図りながら、形や色などによるコミュニケーションを通して、生活や社会と豊かにかかわる態度をはぐくみ、生活を美しく豊かにする造形や美術の働きを実感させるような指導を重視する」ということがあげられています。これは、図画工作科でこそできる大切な指導のひとつです。とはいえ、「ポスターをつくって街角にはる」とか「絵手紙を描いて出す」ばかりが前述の「社会と豊かにかかわる」ということではありません。日常の図工の授業における表現や鑑賞の活動のなかに、十分その活動の場があります。そもそも「社会とかかわる」とは、一番身近な友達とのかかわりがその原型です。今年のテーマの下、研修のプログラムに『友達とのかかわり、コミューケーシャス・プログラムに『友達とのかかわり、コミューケーシャス・プログラムに『友達とのかかわり、コミューケーシャス・プログラムに『友達とのかかわり

今年のテーマの下、研修のプログラムに"友達とのかかわり~コミュニケーションする』が設定されていることは重要なポイントです。「形や色などによるコミュニケーション」の可能性を楽しい実技を通してさぐってみたいと思います。



絵はコミュニケーション

平田智久

当たり前のことだけど「絵」は心の表現、考えの表明です。激しい心の衝動も、ゆったりとした思いをとりもどしたり、イメージが拡がるままに空想の世界に遊んだりと自由なのです。そうした表現は考えたり思っていることを具現化するときもありますが、絵の具やペンなどに触れているときに発想が広がることもあります。ちょうどペタペタとした感触が心地よく感じて、ずっと触っていることもありますね。触っているうちに形や色が変化して「ハッ」とイメージが膨らみます。そうしたことも含めて、触っている…という行為だけでも「心の表現」なのです。

でも現実は「作品」づくりを目指してしまいます。 大人はなおさらです。子どもたちもいつの間にか「作品」 づくりを目指すようになってしまっています。

どうも自分以外の人から"わかってもらえる=認められる=評価される"ために「作品」作りになっているのではないでしょうか。

そのためには「誰が見てもわかる」ことに価値をおいて、うまい下手を自分に課してしまうようです。いくら指導者が「うまい下手ではない」と言ってもだめです。子どもたちは子どもたちの中で認め合うのです。そうした<u>つながり</u>こそ社会性の育ちで、幼児期の4歳ごろから芽生えています。そして6歳ともなると、子ども同士のつながりでグループからクラス集団へと発展していきます。(このあたりを幼小の連携で研究しなくてはなりません。)

子ども同士の中で「心の表現」を行為としても共感できたら…、考えの表明に賛同したり空想の世界が共有できたら素敵です。そうした「心」のやり取り=コミュニケーション能力を育てる研究をしましょう。

感性を働かせながら 見て、触って 感じて 考えて

堀井武彦

新学習指導要領の図画工作科の教科目標に「感性を 働かせながら」と言う文言が加わりました。

「様々な対象や事象を心に感じ取る働き」「知性と一体化して創造性をはぐくむ重要なもの」と説明されています。「理念としては理解できるけど、授業の中でどのように捉えればいいのか ...」と思われる方も少なくないと思います。筆者も同感です。

今回の研修会では、あえてその難しそうな課題に挑 戦します。主に「鑑賞の活動」を教材にしながらワー クショップ的な手法で参加される先生方と一緒に探求して みたいと思います。

再度弁解しておきますが、研修を担当する筆者が答 を知っているわけではありません。

「そんな無責任な!」と不愉快に思わないでください。 講師から一方通行で限定された情報を入手する型式の研修 ではこの難問を解決することはできません。なぜなら、そ の環境では参加者の「感性」が働かないからです。子ども たちが「感性を働かせながら」活動することを支援する教 師も当然「感性を働かせる」必要があります。

「感性を働かせる」ためのスイッチは目に見えません。 しかし、図画工作の時間では表現や鑑賞の活動を通して < 見て、触って 感じて 考えて > 無意識の内にスイッチが 切り替わり、子どもたちの体や心の中にそれらが培われて いくという確信をもって本研究会は活動しています。

閉塞感に包まれた時代に生きる子どもたちの未来の社会への希望と一人一人の幸せを結ぶ礎となる「生きる力」を育む豊かな図画工作の授業づくりのヒントを一緒に探求しましょう! 一人でも多くの方々と交流できることを楽しみにお持ちしています。



こんな授業,いかがですか?

研究員による授業紹介

「授業実践紹介・ピサロの絵のひみつ(鑑賞)」

板橋利行

昨年度1月に、埼玉県立近代美術館が所蔵する作品レプリカをお借りして鑑賞の授業を行いました。6年生を対象に「構図の不思議を知り、描きたいものを描くときの工夫について考よう」という提案です。借りてきたのは『カミーユ・ピサロ「エラニーの牛を追う娘」1884年』。

まずは自分達の描いた数点の作品を鑑賞した後、レプリカの登場です。描かれているものを読み取りながら「作者のピサロは何を描きたかったのか。そのためにどんな工夫をしたのか。」について探っていきました。この際、空の広さを加工した3枚の図版を見せ、構図の不思議と作者の意図を見いだすヒントとしました。目の前の1枚の絵から、児童は実に豊かに想像を広げ、思いを巡らせます。そして、自分で発見したり、友達の考えを聞いたりしながら、ピサロの絵の秘密に迫ることができました。

「美術館から借りてきたよ。」の一言に、児童の期待感が高まります。少ない 図工の時間ですが、たまにはこんな鑑賞の時間もいかがでしょうか。





「マイカラーでかこう!」より ~ 素晴らしき子どもの感性~

依田淳子

3年生になると、水彩絵の具を使った学習が本格的にスタートする。まずは、パレットの小部屋に一色ずつ絵の具をたっぷり出すことから始めた。そして、二色選んで大部屋に取り、水を含ませた筆でていねいに混ぜていく。すると、みるみるとチューブにない色が生まれる。「ねぇ、みてみて!」と、うれしそうにマイカラーを友だちと見せ合う姿があちらこちらで見られた。

そしていよいよ、マイカラーを筆に含ませて、白い画用紙の上に描いていく。筆先を滑らせ、なめらかな線で

描く子がほとんどであったが、一人の子は、全て点で色を置いていた。それも、茶やモスグリーンなどの渋い色で。それらの点は大きさがほぼ同じで、向きが一定であり、リズム感のある作品であった。私が、「なんかステキね。」と声をかけると、近くにいた子が、「あっ、イノシシの大群だ!」と声を上げた。もちろん、描いた本人はイノシシを描いたつもりではない。しかしそこには、まさに、イノシシがドドドド

…と走っている姿が描かれていた。

子どもの感性の素晴らしさに触れた瞬間であった。

まさに、 「イノシシの大群」! サクラクレパス広告